チュニジア便り　チュニジアンブルーの空の下（第1号）

SV　船舶電気　立花邦彦

　12月2日、成田から出国し、フランクフルト、トランジットで12月3日チュニジアに到着。
　初めてのアフリカの大地。確かに、チュニジアンブルーの空、白い壁の家なのだが、いまいちアフリカの地であるような気がしない。何かが足りない。何が？
　そうだ、来る前に思っていたのは、うだるような暑さ。そう暑さだ。
　いくら地中海に面していていると言っても、首都の北緯は仙台と同じ。
　うだるような暑さは、夏だけの話で、日本と同じように四季があるこの国では、冬が寒いのは当たり前の話。天気が良い日であっても朝夕は冷え込むので、暖房がないことには、寒くてもたない。

　首都では10階以上の高いビルが建っている傍らに、古くからの建物が手入れされながらしっかりと、その風貌を誇示している。
　官公庁も、新しいビル、古い建物などに入っていて、官公庁の力関係が建物に現れているような、そんな気がしてしまった。
　イスラム圏でありながら、飲酒の習慣があるのが、この国の特徴。
　さすがに、金曜日は宗教上の理由から、酒屋で酒類が売られることはないもの、レストランに入ると、現地の人たちがビールやらワインを飲んでいることも、なんら珍しいことではない。いいのか？！

　主食はパン。それも、フランスパン。食べ方は、色々とあるもののパン自体が美味しい！焼きたてなど、なにも付けずに食べても美味しくて、ついつい食べ過ぎてしまうことも度々。ハリッサと呼ばれる香辛料にバージンオリーブオイルを垂らした物にパンを付けて食べるか、野菜の漬け物（酢漬け）やツナ缶などをサンドイッチ風にした物を、ここの人はよく食べている。レストランに入って料理を注文すると、パンとハリッサが無条件に付いてくるのだけれど、おいしさのあまり、主菜が来る前に食べ過ぎてしまう、などということも、度々あったりもした。
　青年海外協力隊員時代は、任期完了時に痩せて帰国したけれども今回は、太って帰ることになるかも、などと要らぬ心配なども。

　任地は首都から南に車で3時間半程（400KM位）走った都市。
　チュニジア、第2の都市でSFAXと呼ばれている。
　日本でいうところの、大阪に相当するらしい。チュニジアの経済の実権を握っているのは、ここの人達であるらしい。
　首都近辺の人達はチュニジアンと一般的に自称しているのだがここではスファックスシャンと自称していて、首都近くの人達とは違うということを、誇りにしているところがある。
　また、いい漁場が近くにあることから、ここでは魚が非常によく食べられている。魚市場に行ってみると、ルージュと呼ばれるヒメジの仲間が、安い値段で売られている。

海老や蛸、烏賊など売られている傍らで、サメなども売られている。驚いたのはここでもウナギが食べられていること。こちらの味付けでは我々が慣れ親しんでいる、蒲焼きにほど遠いことが残念。
　自分で調理すれば、蒲焼きが、この地でも食すことができる。
　こちらのサメは、癖が無く（日本だとアンモニア臭がきつい）鶏肉に似た感じの食感と味で、美味しく頂くことができる。

　クリスマス前から、ここでも「異常だ」と言われるくらいに寒い日が続き、服屋に防寒服を買いに走しってしまった。
　日本であれば、建物に暖房が入っているために、外が寒くても建物の中は暖かいので、外に出たときだけ寒い思いをすればすむのだが、ここでは様子が違う。店やレストランなど暖房設備は、いっさい無い。ホテルでも客室はエアコンがあるものの、ロビーや廊下などは暖房が入ってはいない。当然、配属先の建物にも暖房の設備など有るわけもなく、寒さ対策と言えば、ただひたすら重ね着するしか手だてがない。
　警備員の人が、たき火をして暖を取っているのが、とってもとっても羨ましく思えて仕方がなかったくらい。
　建物自体が暑さ対策で、もともと夏を涼しく過ごすことができるように造られているために、冬はただただ、ひたすら建物の中が冷え込むようになってしまう。このために重ね着したところで、足下から、しんしんと冷え込んできて帰るころには、体が冷え切ってしまう。
　風呂にどっぷりと浸からないことには、冷え切った体が暖まることはない。温水器があることが、ありがたい。

　任地に来てから、一ヶ月が経ったが、東京での受けた二週間のフランス語研修では、食事や買い物するのが、やっとのこと。相手がフランス語を話せる人なら、まだまして、店員などでチュニジア語しか話すことができない人とは挨拶以外、交わすことができない。この前、買い物をしているとき、私がアラビア語が分からないために、隣にいたフランス語を話すことができる、こちらの人が親切にも通訳してくれたくらいの状態なので、こと、言葉に関しては、隊員の時とは比べようのないくらいの苦労がある。語学研修の時間が短いのも、原因の一因ではあるけれども。
　隊員の時には、研修言語と任国での言語が同じであったため一カ国語だけ話せれば、日々の生活に不自由は無かったのだが。
　言葉の問題は配属先でもあり、現場の人達は、ほとんどフランス語を話すことができないため、意志伝達は今のところ、もっぱら身振り手振りで行うしか手だてがない。こちらの人が身振り手振りで、普段から会話をしているのが、不幸中の幸いと言えば、幸いなのかもしれないが、どこまで意思疎通ができているのかは不明なところではある。
　23ヶ月後、どの位までこちらの人達と会話ができるようになっているのだろうか。

チュニジア便り　チュニジアンブルーの空の下（第2号）

SV　船舶電気　スファックス市勤務　立花邦彦

前回、1通目のチュニジアからの情報をお送りしたときには、日本から送った荷物が到着してなくて、写真を貼付することができませんでした。今回こそは、と思っていたのですが、未だに荷物が到着せず、写真を撮る手だてが有っても、添付することができないので、写真は今回もご容赦願います。（銀盤カメラは持参したのですが、ディジタルカメラは周辺機器が多いために、別送したのですが、こちらが未到着なのです。）今月末まで待ってみて到着しないようなら、こちらのゴミ最終処分場の片隅にでも埋もれてしまった、と諦めるしか手が無いのかも知れません。

2ヶ月が経過し、ここの生活にどっぷり浸かっている今日この頃。
アラビア語は、アラビア、エジプト、そしてここマグレブ（日の沈む国という意味、チュニジア、アルジェリア、モロッコの地中海沿いの3国が一般的に呼ばれている国）で、それぞれ話し言葉が大きく異なっているということは日本を出る前から知らされていたので、アラビア語を習うことは諦めてフランス語を習うことに。（マグレブで話されている言葉は、ここマグレブでしか通じない。マグレブでも通じないことがあるらしいから、青森の人と熊本の人が方言で話すようなもの。ばりばりの土佐弁と幡多弁でも、意味、単語が違うことが有るくらいだから不思議ではないが。）しかし、日本のように初心者コースだからといって日本語で説明してくれる訳ではなく、全てがフランス語。分からないと言うと、懇切丁寧にフランス語で説明をしてくれる。しかし、当然、こちらは語彙数が絶対的に少ない初心者なので、説明してくれることが100％理解できる訳ではないのですが、手振りや身振り、絵を描いてまで説明してくれるから、毎回ほぼ理解が出来ているのが不思議です。と、言っても、次の日に辞書を片手に復習をしないことには、確実に理解することは難しいのですが。この国の小学校のフランス語の教科書を使っていて、初回は3年生のものだったのに、2回目からいきなり5年生に飛び級されてしまって、分からない単語や文法が多く出てくるようになり、復習に当てる時間が飛躍的に増えてしまって、週末も机の前に座っている時間が多くなった。（ちなみに先生は現役の小学校のフランス語の先生です。）

チュニジア語は挨拶を一通り覚えて（と、言っても、おはよう、元気？、などの簡単な挨拶等）ここの人ばりに。しかし、日本人の発音では、ここの人の正しい発音を真似ることができないので（母音数が多くて、日本人では正しい発音ができない）、下手なチュニジア語を話しているな、と思われていることだと思う。それでも、ここの言葉で挨拶するから、友好的に接してくれている。

この前、昼食時に、サンドイッチを食べていた工員さんが、こちらがまだ食べていないのを知って食べないかと、手振りで誘ってくれたことがあった。大変ありがたいことである。こちらも、これから食べに行くから、と身振りで返答したことだった。アイシュク（ありがとうの意味）の言葉を添えて。

仕事先では、本職の電気に関する図面を描いたり、資料を作ったりという時間よりも、船体屋さんのお手伝いが多く（3艇の図面を同時に短期間で仕上げなければならないという事が年末に決まったので）、にわか構造屋として猫の手を努めています。しかし、学生時代、図学（製図の為の図面を描く方法）の成績が悪かった小生には、展開図面（部品を作るために、必要な材料をどのように展開するのかを表す図面）なるものが強敵で、四苦八苦しながらの毎日です。

それでも、以前に勤めていた会社で、簡単な構造図面を描いていたことが幸いして、なにも描くことができない、ということはないので、猫の手くらいにはなっているのかな、というこころです。

やっっっと、仕事場に電気ストーブが入り、極寒の地から、寒の地になりました。天気の良い日は外の方がよっぽど暖かいので、外に机を持ち出して仕事をしたいくらいです。ストーブがあっても。（以前、北海道で零下25度の中、外で仕事をしたことがありますが、建物の中は別天地のように　暖かいので、たまらないほど寒いと感じたのは、この国に来た今度の冬が生まれて初めてです。）日本の建物は寒さ、暑さに対する工夫がよく考えられていると、今更ながら職場のSVみんなで感心することしきりです。（と、いってもコンクリート建築物ではなく、日本家屋と呼ばれる家）

1月下旬からサッカーのアフリカカップがチュニジアで開催されていて、今日（2月14日）、チュニジアとモロッコによる決勝戦が行われました。結果は、チュニジアの勝利。道では車のクラクションが、カフェでは雄叫びが、という状態です。フランスのテレビでは、フランスにいるチュニジアの人達が劇場を借り切ってサッカー中継をみんなで見ている映像を流していましたが、向こうでも大変な盛り上がりの様子でした。（ちなみにテレビはフランス語なので、今のところ、ほとんど内容を理解することが出来ないのですが、映像があれば大体のところは理解することができます。しかし、アラビア語の放送は映像や字幕があっても、ちんぷんかんぷんです。）

2010年にアフリカのどこかの国でサッカーのワールドカップが開催されるということがすでに決まっていて、アフリカの各国が開催に手を挙げてアピールをしている今、チュニジアにとっては今年のアフリカカップの開催、そして優勝とFIFAに対しては、好印象を与えることができたのでは、と思います。しかし、地方の競技場は客席の収容人数が少ないので、新たに競技場を作らないといけないのが実情です。日本でもこのことは同じでしたから特に問題でもないでしょう。

この前、知り合いの（もちろんチュニジアの人）建築家が、新しい競技場のコンペ図面を見せてくれましたが、ずいぶんと立派な競技場が計画されているようです。

今住んでいるアパートの大家さんは、20数年前にJICAの研修員として来日し、最近は日本の水産会社とこちらの会社の窓口（仲介）をしている関係で日本語を話すことが出来ます。

このことは、こちらの生活にどっぷり浸かるために、大変重要な要件であることは疑いありません。彼は大の親日家であり、JICA事務所だけでは無く、在チュニジア日本国大使館の人達とも交流があるくらで、長期チュニジアに滞在している日本人なら、みんな彼のことを知っているのです。上流社会に属する人でありながら、必要時以外はこれらの人達と交流を避けて、それ以外の人達と多くの時間を接してしるから、地に足のついた生活（？）の一部分を伝授してもらうことができていると勝手にこちらで解釈しています。（レストランは、ここの人が愛用する安くて美味しいお店。高くて美味しいのは当たり前なので、彼にとって行くこと自体が邪道なようです。本件、同感です）協力隊員なら原則的に下宿なので、頭の先から足の先まで、どっぷりと現地の生活に浸ることができ感じることができるのですが、SVは借家暮らしなので、現地の人達との交流の時間をどうやって得るかが課題の一つなのですが、彼の御陰でかなり楽をして、その時間を得ることができています。

彼曰く「日本人、意味は、いい人」。この言葉は、彼の口からよく聞きます。この言葉の意味するところの活動（生活）ができているのだろうか、と、考えてしまうことも度々あります。「国籍が日本人であっても、悪い人は、日本人ではない。」という彼の言葉の裏には、JICA研修員時代に、研修先の人達が心の底から彼に接していたのだろう、ということを推測することができます。

また、彼は仕事で1年に1度程度、日本を訪れているのだけれども、近年、日本が日本でなくなってきていて、とても寂しい思いをしている、と話したりもします。
「日本人、意味は、いい人」この言葉、短い言葉ではあるけれども、奥がとても深い言葉であり、我々日本国籍を持つ者にとって、考えなければならないことが、多く含まれているのではないのか。本来の日本の生活はどんなものだったのか、人と人との接し方はどういうふうなものだったのか、原点に戻ってこれらのことを考えてみることが、我々日本国籍を持つ者にとって大切なことであり、やらなければならないことであるように、改めて感じさせられてしまった言葉です。

この先、日本はどこに向かって進んで行くのでしょうか？　考えてみたことがありますか？
西洋かぶれ（この言葉が適当であるのかはおいといて）一辺倒で、ただ突き進んできたここ何十年間。無くしてしまったものは、ないのでしょうか？　隊員時代にも同じように感じていたのですが、今回、外国の人（ここでは小生が外国の人なのですが）に指摘をされるという思ってもみなかった事が起き、考えさせられてしまったこと、しきりなのです。

チュニジア便り　チュニジアンブルーの空の下（第3号）

SV　船舶電気　スファックス市勤務　立花邦彦

日本では、そろそろ花見が催されるのでしょうね。こちらには、残念ながら花見の習慣がありません。桜の木はないのですが、綺麗な花をつける木は色々とあるのです。2月にはアーモンドの花が、あちらこちらで満開になっていて、暖かければ花見をしたいくらいの美しさでした。

さて、3回目ともなると、何を書いたらいいのか。そろそろネタを探さないことには、書くことも少なくなってしまうので。幸い前回の便りを送った後に、日本からの荷物が到着したので、写真を貼付して、中身を薄くすることも可能となりました。（笑）

先月、小野大使が職場の視察にお出でになりました。視察は、ついでに、ということであったのですが、こちらの役所のお偉い手さんが、どこから情報を手に入れたのか分かりませんが、挨拶にやってきてました。（知事他には前日、挨拶を済まされていました。）大使は、本来「草の根援助」の対象案件である、乳ガン検査器の引き渡しを行うために、こちらに来られたのです。この案件は、チュニジア人の夫を持つベルギー人画家が、（この方々は、任地であるSFAX市在住です）　自分の描いた絵の売り上げを乳ガン撲滅の為の活動に寄付していたのですが、検査器を買うためには金額が足りない、ということで大使館に依頼したのです。我々SVも前日のセレモニーに参加しましたが、大使はアラビア語が堪能なので、県知事などはフランス語ではなくて、アラビア語で挨拶をされていました。小生にはちんぷんかんぷんで、何を言っているのか、さっぱり分かりませんでしたが。これは、フランス語でやってもらっても同じことなのですが。「自分の生まれた国ではなく、今を生きている国のために、少しでも手助けができれば、幸せです。」と画家が言っていたことを、フランス語が堪能なSVが教えてくれました。

どうでしょうか。我々SV（隊員含む）は、お手伝いをさせてもらいに来ているので、このような言葉を口にすることもあるかもしれませんが、ボランティア精神だけで活動している人の言葉となると、ずっしりと重みがあると思うのです。

SVの中には変に勘違いをしていて、「援助をしてやりに来ている。」とか、「金がなければ援助ができない。」などと、口にする人がいます。SVは専門家ではなので活動費がないことは応募の時点から分かっていることですし、援助をしてやっているという考え方が、ボランティア精神とは本来どうゆうものであるのかが理解できていない証拠ではないでしょうか。彼女の爪のあかでも煎じて飲ませてやりたい気分になります。国費（税金）を使ってここまで来させてもらって、挙げ句の果てに愚痴や悪態を付いているようなSVなら、さっさと帰国してもらった方が、この国や日本の為になると思うのですが。この考え間違っているでしょうか？

隊員は年齢が若く変な社会経験が豊富でない人が多いので、与えられた状況の中で、自分は何ができるのだろうか、と自発的に活動を見いだすことができる事が多いのです。

SVの多くは定年まで会社（官公庁他）勤めをしていた人なので、ある程度の地位になっていた人が多いためか、全てをお膳立てしてあげなければ、自分ではなにもしない出来ない人が以外に多いのに驚かされました。隊員OB（OG）のSVは、隊員時代の経験が役に立っているようで、みなさんそれぞれに自分が出来ることを見つけて、生き生きと活動をされています。言葉を覚えるのも素人さん（いつからかは知りませんが、隊員OB（OG）ではない人をこう称しています。隊員OB（OG）は玄人です。）よりも早く、任地にとけ込むことも上手なようです。経験があるということだけでこの差が出ているようには思えません。ここいらあたりは、心構えの差では思います。

話が大使の視察から変な方向に向かってしまってすみません。

今回、大使は秘書官も付けずお一人でした。（もちろんドライバーはいますが）大使からの厳命でこうなったとのことです。アラビア語が堪能であるから出来る事だと思いますが、大使の行動力にも驚かされます。きちんとした予定は前日の行事と我々の職場の視察、大学への表敬だけであったために、時間をやりくりして、あちらこちら予定以外の所を見て回って帰られたとのことです。JICAもトップが緒方さんに変わり現場主義ということがよく言われるようになりましたが、大使は以前から現場主義の方でいろいろとご自分の目で見られて、ものの判断をされている、と以前大使館の方に聞いたことがありましたが、今回、まさにその言葉通りであることがよく分かりました。

留守を預かっている公使他職員の方々は、気苦労が多いかもしれませんが、この国の事を（実際の状況を）よく知るためには大事なことではないかと思います。

話は変わって、このところ天気がはっきりせず、どんよりとした日が続いています。先日などはフランスで24度を超したとテレビが言っていましたが、こちらは未だに20度の壁が厚くて、なかなか春爛漫とまでは至っていません。暑い所大好きの小生にとっては、もうしばらく辛い日が続くことになると思います。

活動の話を少しばかり。６月、７月のマグロ漁本番に間に合うようにと、昨年末から準備を進めている船は、木型がほぼ完成し、細部の手直しに入りました。図面から木型を起こして船を造ることは、この国では初めてのことであり、最初はどうなることかと思っていましたが、船大工さんの腕も思っていた以上にいいので（40m超の木造船を図面無しで造るのですから）安心していられます。この間など、船体設計者がいない時に「ここはこうした方が格好が良くなるがどうする？」と聞かれてしまって、困ったこともありました。視察時大使が「アラビア人は物事をイメージとして（写真のように）覚える。日本人は指先で覚える。」と言われていました。

40m超える船を図面無しで造ることや船の形を見て形状の変更を提案することなど、やはりイメージが頭の中に出来上がっていないことには出来ないことです。大使の言葉が現実として理解できました。

木型は来週にでも、コンパウンドを使っての最終仕上げ（雄型としての）に入る予定で4月中頃には、雌型が出来あっているはずです。（船は雌型を使ってFRP成形します。）今、仕事をしてくれている船大工さんんも、一時期、仕事がつまらない（図面で形を切り出すために自分で考えることが無い為に）と言って、行方不明（？）になったこともありました。彼がいない時に他の船大工さんが来たのですが、腕が悪くてその日の内にお役ご免になっていました。どこの国でも、腕が立つ人、立たない人がいるようです。腕の悪い船大工さんの仕事のレベルなら日曜大工をやったことがある人なら、十分に肩を並べることができるくらいです。（少し大げさな表現かもしれませんが）

この船が最初に試験航海に出ることになると思われますが、漁業従事者にとって日本式の船型がいいのか、それとも従来の丸底（ヨーロッパ型）がいいのか、の判断がそのときになされるわけです。もし、従来型の方が評価が高いとなると、我々が今やっていることが、殆ど否定されることになってしまいます。経験豊富な船体設計者がこちらの漁業関係者の希望（要求）を盛り込んで計画した船ですから、まずはそんなことにはならないと思いますが。

造船工場は基本的に、土曜半ドン、日曜休みなのですが、他の船（技術協力対象の船、通常の受注船）の製造も平行して行われている為に、平日残業、土日仕事と日本並（？）の勤務時間となっています。職人さんからは「疲れた」というぼやきを時々聞きます。粗い仕事をして後から余計に手直し時間がかかってしまうということが日常茶飯事のように行われているのも、原因の1つではあるのですが。一般的に希望納期を守る守らないということについては、書面による契約社会ではないために、少々ルーズになりがちであることに間違いはありません。（住んでいるアパートのガレージ工事も3か月目に入りましたが、何時完成なのか見当もつかないくらいです。日本であれば1月もかからないで十分完成すると思うのですが。）工期を守って仕事を進めるという事を助言することも我々SVの役割ではあるのですがここでの習慣にそぐわないので、どの程度までプッシュすればいいのかが課題です。（2008年のEU自由貿易圏参加に向けて、品質の向上や納期を守るということもこの国の重要な課題になっています。）

天気予報では明日の天気もはっきりしないとのこと。いい加減、すっきりと晴れてチュニジアンブルーの空を見ることができるようになってくれるといいのですが。

チュニジア便り　チュニジアンブルーの空の下（第4号）

SV　船舶電気　スファックス市勤務　立花邦彦

今日は砂曇りで（日本だと黄砂が飛んできて、曇ったような天気になることがありますが、ここではサハラ砂漠からの砂です。）風も無いのに、窓を明けていると部屋に中に細かな砂が入ってきて、なにからなにまで、ざらざらです。

こちらも、やっと暖かくなってきました。と言うよりも、天気がいいと暑いといった感じです。ですが、朝晩は冷え込むので、夜遅くまで机に向かうときなどは足下に小型電気ストーブがないと靴下だけでは、ちょっとばかり辛いところです。

船は3艇の原図（木型を作るための原寸大の線図）作成が完了し、最初の1艇はいよいよ、木型の仕上げに入りました。予定よりは少し遅れているものの、今月末までには木型が完成しそうです。木型が出来てしまえば、船が出来る上がるまで1月もかからないので、なんとか6月の漁期には間に合いそうです。残りの2艇も当初は今年の漁期に間に合うようにと言っていましたが、技術協力がメインであり、資金協力はできないので、船の製造日程については今のところ全てオーナー任せになっています。大きな会社なら体力があるから、次から次へ職人さんを雇ってでも造ることもでるのかもしれませんが、10人にも満たない会社では、そうそう人を増やすこともできないのです。それでも、チュニジアで唯一、FRP漁船の製造を専門にしていてる会社なので、それなりに仕事は入ってきています。

この国では、巻き網船の殆どが、今、住んでいるSFAXという市の港を母港にしています。最近は、マグロやカツオがよく揚がるようになりました。網で捕るために、マグロは傷が入ったりして商品価値が下がることが多く、日本に向けて出すことができる量は、年々少なくなってきているとの話でした。カツオは日本近海で見ることができるものとは種類が違うのですが味はカツオです。試しにたたきにしてみましたが、美味しく頂くことができました。話がそれました。この国の巻き網漁も（マグロをターゲットにした）、ここ数年で終わりになるのではないのか、というのがここの漁業関係者の話です。年々漁獲高が下がっている上に、魚の価格が横ばいか下がりぎみなので、頭がいたい問題のようです。延縄や引き縄の研修の為に日本に来られた方もいるらしいのですが、役人だったために漁業従事者に対して広く普及をすることができていないようです。JICA研修に出る人達は一般的にエリートなので、机の前でのペーパーワークしかせず、現場に出ることが殆ど無いのが実情とのことです。このようなことは、どの国（被援助国）でも同じなのですが、私企業の人を研修に出すことができないので、致し方ないところはあります。我々SVや青年海外協力隊員がそこいらの補完をすることができればいいのですが、如何せん「金と力は無かりけり」なので、できることを少しずつやるのが精一杯のところです。

過日、アパートの大家さんに誘われて（と、言うよりも連れて行かれてなのですが）大家さんのお父さんのお宅にお邪魔することがありました。丁度、夕食時だったので本物のチュニジア家庭料理を頂くことができました。魚のスープ、魚の煮付け、鳥（七面鳥）の煮付けを頂きました。食堂で食べているサラダチュニジアンではハリッサと呼ばれる辛み調味料を使うのですが、頂いた料理は、魚のスープに少し使われていただけで、煮付けにはターメリックや塩等が使われていて、小生にとってとても美味しく感じました。今度、作り方を教えてもらおうと思っています。

カメラを持っていなかったのが残念でなりません。次のチャンスには写真を。美味しい料理の作り方を教えてもらっても、その国の中で作る時には、同じような味が出せても、日本に帰って同じように作った時に味が違うことが多いのは、やはり食材や調味料の違いや水の違いが有るからなのかなと思ったりもします。美味しい料理を教えてもらうのは、外国で楽しく暮らす上では大事なことです。食が乏しいと、なにをするにしても、どうしても力が入りませんから。（笑）

ここの鳥肉屋さんでは鶏と七面鳥とが売られていています。鶏肉専門のお店では、その場で選んだ鶏を絞めてくれます。もちろん生温かな肉を持って帰ることになります。内臓はレバーと砂ズリはくれますが残りの部分は、最初に捨てないように言わないと持って帰れません。今時（鳥インフルエンザで云々というのは別にして）、日本では鳥の内臓を好んで食べる人は、そうそういないでしょうが、小生は好物なのです。 八百屋さんの店頭からまたタマネギが姿を消してしまって、ネギ擬きを代用品にしているのですが、これも購入時に「そのままください」と言わないと、ネギの根の白い部分だけをよこされてしまうのです。青い葉の部分は、こちらでは家畜の餌とのことなので、小生なんか家畜の餌を横取りして食べていることになります。どうりで初めて八百屋さんに行った時に、青い所が大事だからと言ったら笑っていました。今は、黙っていても、そのままくれるようになりましたが。

来週はJICAの公式行事があり4ヶ月ぶりの首都です。隊員時代、4ヶ月間も首都に上がらなかったことがないような気がします。配属先とのミーティングが2ヶ月に1回くらいのペースで持たれていまいたから。ここでの所属先は商工会の傘下にある造船・船具組合ということになっていますが、実際の仕事先は、上で書いた造船所ともう一つ別の造船会社なのです。所属先に行くとしても、同じ市内なので市外に出ることすら必要がない状況です。年が明けてから、殆どの土日は仕事場に出かけているので、どこかに出かける時間が無いと言えば無いのですが。隊員時代は首都に上がるのが楽しみでしたが、今はなんら思うところがありません。年を取ったということもあるのかもしれませんが。首都には有名な観光地もあり首都在住SVは、あちらこちら回られているようです。時間があればと思っていてもなかなか時間を捻出できない状況にあるので、先送り先送りになっています。

残り18ヶ月近くあるので、そのうち時間ができたら、ゆっくりと回ってみたいと思います。などと考えていたら一度も行かなかったということになりそうです。

話は変わって、イラクの状況です。最近、かなり危ない状態に逆戻りですね。日本人3名が拘束されたとのTVニュース（フランスの放送）が流れていました。１人は記者だからある程度のリスクを覚悟で入国していたのかもしれませんが、残りの２人は危機管理ができていなかったような気がします。「冒険も過ぎれば無謀でしかない。」と誰かが言われていたようですが、まったくその通りだと思います。日本で心配されているご家族の方には申し訳ないのですが、小生には「彼らは自らすすんで無謀をした。」としか思えません。冒険と無謀をはき違えてしまった彼らは、この先いったいどうなってしまうのでしょうか。日本政府の対応は、いったいどのようなものになるのでしょうか。ここしばらくは、ニュースを見落とさないようにしたいと思います。と、言ってもフランス語のTVなので100％完全には理解ができないのが辛いところなのですが。スペインのTVでは取り上げられられていなかったので、最終手段は日本の新聞会社のHPを覗くということになりそうです。

チュニジア便り　チュニジアンブルーの空の下（第5号）

SV　船舶電気　スファックス市勤務　立花邦彦

先日、午後から雨が降り帰宅時間になっても降り止まないので、傘をさして帰りました。家に着いて傘を乾かそうとしたら、土がいっぱいついているではありませんか。服にも。車に泥水をかけられたのでは無く、空から泥が降っていたのです。サハラの細かな軽い砂が風で舞い上がり、雨に混ざって降っていたのです。日本だと黄砂が飛んできて、ということが年に1、2回あるでしょうか。ここでは風が強い時には、必ずサハラの砂が飛んできます。（ここの南と西にサハラが広がっているので、南風、西風の吹くとき、が正しい表現ですが）

扉とか窓とかに隙間があるので、強い風が吹いた日には、床やらベッドやら、ざらざらの状態で、掃除をしないと、砂埃に埋もれてしまいます。昨日、天気が良く風も無かったので家中大掃除をしたのですが、夕方、強い風が吹いてきて、あっというまに砂だらけに。今日また、掃除のやり直しでした。今年は天気が異常だと、こちらの人が言っていました。年柄年中、こんな調子だと、たまらないところなのですが、そうではないとのことなのでこまめに掃除をして、砂に埋もれないように気をつけるようにしています。

日本式での設計、製造、第1号である船の製造用型が完成間近になりました。いよいよメス型と呼ばれるものが作られています。型を使ってFRPを成型するのですが、FRPが硬化した後に、型からはずしやすくするために、半割というやりかたで、型を作っています。写真は船の左半分の型成形をしているところです。木で作った型をもとに、メス型を作るということは、この国でも、イタリアやスペインから木型を買ってくるという方法で行われているのですが、ゼロから作るということは初めてであり、造船所の人達にとっても、色々と勉強になっているようです。小型漁船の場合、船の形が日本と西欧では、大きく違っていて、西欧式は丸くてぼってり形、日本式は平らくてスマート形（うまく形の違いを表現することができませんが）といった感じです。物を作るということに関しては、出来の良さ悪さを抜きにすれば、及第点だと設計担当のSVが言われていましたから、作るということに関しても、この先、いろいろとアドバイスを行っていくことになると思います。FRP製造担当のSVも派遣要請がでているのですが、人が見つからないようです。設計担当のSVの方は、製造に関しても、その道のプロとまでは行きませんが、知識も実作業経験もお持ちなので、当分は現在の人員で技術協力することになります。若い隊員ではなくSVであるからこそ、今まで日本でやって来た仕事上での経験が生かされてくるという、いい実例だと思います。

船のデザインは、今後も日本型で行われることになると思いますが、どのように船の外形を考えて、それを実際の図面にするのかということは、設計担当SVの残り任期1年という、短かな期間で、どこまで技術移転することができるのか、現段階では不明です。私の担当である船舶電気については、設計手順書や、工事要領書などの説明用資料と、実際に船で行う艤装作業を通して進めるように計画をしていて、図面が一段落してから作り始めています。

しかし、アラビア語はまったくできない、フランス語もやっと日常会話のレベルに、という段階で、パソコンの力を借りないと、とてもとてもフランス語の資料を作ることができないというのが実情です。翻訳ソフトが日本語からフランス語に訳してくれるのですが、誤訳が結構あるために、自分で読んでみておかしなところがあれば、その箇所を訂正する、ということになります。文明の利器の御陰で、資料の作成に要する時間が、全て手作業で行うよりかなり少なくてすむために、隊員の時に資料を作った時から比べれば、楽になりました。しかし、言葉を覚えなければならない、という事に関しては、昔と同じなのですが。

早いもので、もうすぐ日本を出てから、半年が経とうとしています。こちらの生活にはとっくに慣れた（狎れたではありません）のですが、日常の言葉がなかなか上達しなくてどうしたものか、と思っています。半年を目安に、家庭教師をお願いして、週2回教えてもらってはいるものの、自分の語彙が増えないのに困っています。1日1つでも1年なら365語覚えることができる、という計算なのですが、夜覚えたつもりの言葉を翌朝にはすっかり忘れてしまっているというのが現実で、なかなか前には進みません。どなたか一発記憶をすることができる技をご存じでないでしょうか。アラビア語は挨拶以上のことを覚える余裕が今のところないのですが、帰るまで同じような状況のままのような気がします。

船を造るときに、実際の作業を指導する上では、「やってみせ」という常套手段を使うことで、なんとかなるのですが。はてさて、作業をする以前の計画・設計段階での説明がうまく伝えられるのか。まあ、これも、お互いに（教える側、教えられる側）気持ちがあれば言葉が通じなくても、ほとんどのところまで理解してもらうことができる、ということが分かっているので、気持ちで押すつもりでいます。大学とかで教えるのであれば、そうはいかないでしょうが、最初は70%、2回目は80%と徐々に理解してもらうことが出来れば、それで十分だと思うのです。日本であっても、最初から100%の仕事が出来る新人はいない訳ですし。言葉ができないからと言って、いろいろなノウハウや技術等を伝授することができない、というのは何かを伝えようとする気持ちがない人の、言い訳でしかないような気がします。言葉ができなくても、気持ちが有ればなんとかなるのが不思議ですが、こればかりは理屈ではなく実際に経験してみないことには分からない事です。言葉が通じなくても、喜んでいるのか、怒っているのか、悲しんでいるのか、などは相手の態度で分かるものです。気持ちが言葉よりも大事であることは間違いないでしょう。語学が上達しない言い訳をしている訳ではなく、言葉よりも気持ちが大事であるということを書きたかったので、そこのところお間違いなきようにお願いします。

現在住んでいるSFAX市からフェリーで1時間ほどのところに、ケルケナ諸島と呼ばれるところがあります。チュニジアは古くから入れ替わり立ち替わり支配者が次々と変わった国であり、民族的にも多種にわたる人種の混血化が進んでいることは事実です。
しかし、ケルケナ諸島の人達はSFAXの人達とは違うと言いますし、SFAXの人達はチュニスの人達とは違うと言います。事実、ケルケナの人、SFAXの人、チュニスの人の間で物の考え方や生活の仕方が違うようです。我々日本人と考え方が一番近いのがケルケナの人、西欧に近いのがチュニスの人です。日本でも関東人、関西人、などと分類されていることから考えれば不思議な事ではなく、ごく当たり前のことなのですが。

仕事柄、漁業関係者と話をすることが多いのですが、殆どの人はケルケナ諸島出身です。SFAXの人が船のオーナーをしている場合もあるのですが、金儲けの為だけに船を持ち、船員さんを使っているということがほとんどということで、評判が良くありません。

本来、大型船の場合、漁をしてはならないとされている海域までも、SAFXの人の持ち船は入って行って漁をしているので（オーナーからノルマを突きつけられているのでノルマ達成のために違法操業をしているのです）、小型船を使っている零細漁民の人達からすれば目の敵なのですが、彼ら（SFAXの人）は役人に対して力を持っているので、どうにもならないのが現実です。力を持っている人間が、役人をコントロールするということに関しては、日本もチュニジアも変わりがないようです。

SFAXの漁港（造船所はその並びにあります）では、今まで「日本人＝魚の買い付け人」でした。SVが派遣されて本格的に船を造るようになってからは、「造船のテクニシャン」という言葉も使われるようになったそうです。港にある造船所に常駐するようになるのは来月位いからになりそうです。ここにきて前評判が高いだけに、船体設計のSVの方はかなりプレッシャーがある、と話されていました。日本で行われているように、模型での実験は出来ない、型が出来上がった後で大がかりな修正はできない等の制約があるために大変だそうです。小型漁船であれば、電気関係は船の構造部分を作ることから比べると、作業的にも僅かなので、要点だけおさえておけば、きちんとした物ができるので気分的に楽です。しかし、手伝いで設計した部品や船体構造の出来栄えが心配ではあります。
もちろん、船体設計のSVにチェックはしてもらってはいますが、ここは日本ではなくチュニジアですから、思わぬ事が起こることも考えられます。勝負は下駄を履くまでは分からない、と言われますが、ここでは船が出来上がって走らせてみないと結果が分からないので、ここ当分は枕を高くして寝ることができそうもありません。と、言いつつも、しっかり7時間寝ていることが多いのですが。（風呂敷残業が多いときは5時間足らずの時もありますが、だいたいは7時間睡眠を取ることができています。）そんなこんなで船も着々と製造工程が進んでいて、来月には第1艇目の進水式を迎えることができそうです。次回報告は、進水式のことを書くことができればいいのですが。